音楽の処方箋

文／中 東生

第6回 日本人らしさ

日本人の国民性とはどのようなものだろう。もちろん地域にもよるし、世代にもよるので一概に言えるものではないが、「日本人らしい」と言われて確実にうなずける特徴はあるのではないか。他の国民と比べて、勤勉、恥ずかしがり屋、真面目、ノーと言えない、などと並んで、信用できる、というレッテルは日本人の傾向であると思ってきた。音楽界でも、「契約書の原本が届くのは遅くて苦労するが、日本人との契約なので、今まで問題は起きていない」などと、よく聞かされていた。しかし、そんな暗黙の了解を覆す事件が起こった。個人的に双方の言い分を正確に調査したわけではないので、被害者側の主張だけしかご紹介できないことをご理解いただいた上で、「ここだけの話」を耳打ちしたい。

ある日本人がザルツブルグ音楽祭を日本に招いた。しかしツアーが終わってもギャラが支払われない。そしてその次の訪日ツアーに向けてプロジェクトは進んでいく。ザルツブルグ側は出演者へのギャラを立て替えて支払い、その間をつないでいたが、日本からのお金は届かない。最終的には、「前回のギャラが支払われない限り、今回のツアーは中止する」と当たり前の宣言をし、実際に日本ツアーはご破算になった。

その後、同じ人物を介して日本でのコンサートを予定していたチェチーリア・バルトリも被害に遭った。両親共にオペラ歌手の家庭に育ち、早くからスター街道を走り始めたが、決して大きいとは言えない声量と、自分を生かせる古典的レパートリーのためにチューリッヒ歌劇場を中心に活躍の場を広げ世界的スターであり続けているので、ご存知の方も多いと思う。そのバルトリが日本に出発する直前になって、「チケットの売り上げが伸び悩んでいる」という主催者側の理由から、もともと妥協したコンサート数をもう1つ減らされ、従来飛行機の長旅に弱い彼女は、たった2回のコンサートのために日本に行くのは負担が大き過ぎる、とキャンセルせざるを得なくなった。しかし、売れ行きの悪かったという会場は、ろくな宣伝もしておらず、その他の会場は好評な売れ行きであったと聞いている。筆者も東京オペラシティのHPにインタヴュー記事を依頼され、コンサートプログラムにも執筆させて頂き、準備万端だったのだ。

バルトリ側は、「せめて興行主側からの契約変更のためにキャンセルを余儀なくされた、とファンに伝えて欲しい」と頼み、その問題の人物は承諾したにもかかわらず、その約束は守られなかった。そして日本の音楽ファンの中には「やっぱり彼女もスター特有の気まぐれキャンセル？」といった解釈をする人も少なからず出て来るようになり、彼女の日本での人気は完全に下火になっている。

筆者が初めてバルトリにインタヴューした2005年は、遠い昔に行った日本の聴衆への郷愁を語ってくれた。2回目は訪日直前で、前述の日本人興行主がどんなに凄いサービスをしてくれるか、面白可笑しく語ってくれた。3回目は前々回の新作CDラウンチパーティ翌日で、「これからヨーロッパを回るコンサートツアーを日本でも実現させてもらえそうなスポンサーがいたら、編集部までご連絡下さい」と茶目っ気たっぷりにインタヴューを締めくくった。前回のラウンチパーティ翌日のインタヴューでは、実現されなかった日本でのコンサートを憂いつつも、日本へ返り咲く策を、筆者と一緒に模索するほどだったのに、去年、時間的にも拘束されるザルツブルグ音楽祭のオペラ部門の芸術監督に選ばれてからは、「しばらく日本へ行くつもりはない」と宣言するほどに心が離れてしまったのだ。

そのバルトリの新作CDが3年ぶりに発売される。『ミッション』というタイトルのように、実は様々なミッションを与えられていて、当時のヨーロッパ中を旅しながら政治・宗教界でも暗躍していたと言われている17世紀の謎の作曲家アゴスティーノ・ステッファニがテーマだ。彼女は今まで2年毎にニューディスクを発表し、このディスク離れの時代に1000万枚という奇跡的な売り上げを記録することでも有名だが、今回はドイツのテレビ局制作番組でもお馴染みのベストセラー推理小説作家ドンナ・レオンの新作とシンクロナイズさせており、さらなる売り上げが期待されている。

しかしその新作CDについてのインタヴューを申し込んだところ、今回は電話インタヴュー30分しか取れないという。ここまで彼女の日本への愛情は冷めてしまったのだ。たった1人の日本人の間違った行いで、高い芸術性を持ったアーティストが気まぐれと呼ばれ、特別な愛着を持っていた観客に背中を向けてしまった。残念な話だ。

「この件について、釈明記事を載せよう」と今までに何度か勧めてみたが、「今さら誰かを責めても何も変わらない」と、この状況を受け入れている。これはイタリア人らしい大らかさのなせる技であろう。せめて異国に住んでいる私達は、日本人としての美徳をなくさず、同胞の汚点をカバーしてあまりある人間になりたい。そして彼女の芸術を生で体験するチャンスに恵まれている私達。これから寒さが厳しくなっていく中、職人技を聴きながら、ローマ生まれの太陽のようなバルトリから元気を与えられて温まりたい方は下記の処方箋をお試しいただきたい。彼女がまた、日本にも目を向けてくれるよう祈りながら・・・。

（写真左）オクトーバーフェストの衣装に身を包み、ファンとの記念撮影に気さくに応じるチェチーリア・バルトリ。

Cecilia Bartoli コンサートツアー『MISSION』

チューリッヒ・トーンハレ公演　12月7日（金）

CD『MISSION』

Cecilia Bartoli I Barocchisti+Diego Fasolis DECCA